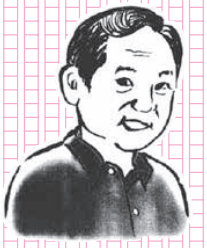

町長エッセイ

１月１９日にときがわ町の萩日吉神社前において、流鏑馬（やぶさめ）が奉納されました。流鏑馬とは馬を走らせながら、騎手が弓で一の的、二の的、三の的を目がけて矢を射るもので、３年に１度、小川町の大河郷と、ときがわ町の明覚郷が町の境を越え一緒に奉納する比企郡に唯一残る神事です。

木曽義仲が没した５０年後の天福元年（１２３３年）、家臣であった大河郷の横川・小林・加藤・伊藤家の四氏と明覚郷の荻窪・市川・馬場家の三氏により萩日吉神社に奉納したのが始まりと伝わります。

奉納の前日、腰越中区の「ふれあいいきいきサロン」新春講演会で、大河郷の流鏑馬について話しました。

祭典当日は、早朝より始まり、地元でも見たことがない人も多く、夜の明けるのを待って、地域の皆さんがお子さんやお孫さんを連れて集まりました。

古式ゆかしい武士の装束を身に付け、白馬に乗った騎手、矢を背につけた矢取りっ子などの流鏑馬一行は、大河橋のたもとで馬上から次々に四方へと矢を放つ神事を行い、松郷峠を越え、およそ二里先の萩日吉神社の特設馬場へ向かいました。

松本恒夫